

ネパールでキノコと出会った話

木原 正博

皆さま、幽霊会員の木原です。多くの方には初めまして。

2019年10月下旬、私は2週間ほどネパールを旅行しました。その折、面白いキノコとの出会いがいくつかありましたので、旅行記風にご紹介したく、といっても、専門家ではありませんので、事実関係など間違いもあろうかと存じます。ご容赦ください。

ご存じの通り、ネパールは国の高低差が大きく、サガルマータに代表される標高8,000メートル級の山が連なるヒマラヤ山脈がある一方、インド国境に近いタライ平原は海拔わずか70メートル。それに連れて、植物相も様々で、日本の植物が5,400種と言われるところ、面積で日本の4割しかないネパールでは6,300種が知られています。

そんなわけで、キノコだって豊かに違いない！と私は思っていて、いつかネパールでキノコ観察できないものかと長く夢見ていたのです。

そんな折、私の親しいネパールの友人スッバ氏が里帰りすることになり、「あなたに故郷の山里を見せたい、来ないか」と誘われたので、一も二も無く、旅立ったのでありました。

カトマンズにて

しかし、旅は最初から躓きました。

安さに眼がくらんで、中国経由ルートを選んだのが祟ったか、上海のセキュリティー

チェックにスーツケース（具体的には、その中にあったリチウムイオンの予備バッテリー）がひっかかり、そのせいで5日間もカトマンズに滞在する羽目になりました。

（もちろん、バッテリーをうっかりスーツケースに入れていた私が悪いんですが、中国東方航空の昆明の職員にスーツケースの鍵を渡して、「僕はカトマンズにすぐ行かなくてはいけない。鍵を上海に送って、そこで当局に渡して開けてもらって結構だから、処理が終わったらすぐカトマンズに送って」と言っただけカトマンズに行ったのに、待てど暮らせど荷物が来ない。連絡もない。やむなくこちらから電話すると、実は、その鍵を誰かが失くしてしまい、「錠を壊していいか確認できなかったの、あなたからの電話を待っていました」と、ぬけぬけという精神が私は理解できません。それはさておき…）

早く、彼の生まれ故郷の山里や、奥さんの実家のあるルンビニに行きたかったのですが、ともかく、荷物の到着まではカトマンズに居ざるを得ませんでした。

しかし、カトマンズは2度目だったから、ダルバール広場も、バクタプルも、クマリの館も、スワヤンブナートも見てしまっていて、他に行くところがなくなってしまいました。

で、「地球の歩き方」をパラパラ見ていると、ふと目に留まったのが、スワヤンブナートの近くにあるという「自然史博物館」の項目。

「トリプヴェン大学所属の小さな博物館

…ここには5万5千点以上の貴重な動植物や化石の標本が陳列されていて」という記述がありました。

行って見ると、実際、小さい博物館でしたが、キノコの液浸標本を陳列した棚がひとつあって、これがちょっと見ものでした。

シロアリの巣から生える珍菌にして、大変美味なものが多いという「オオシロアリタケ属」のキノコが多数展示されていたのです(以下リストご参照)。

こういうのを「人間万事塞翁が馬」というのでしょう。

- Termitomyces aluminus*
- T. clypeatus* (トガリアリヅカタケ)
- T. eurrhizus* (オオシロアリタケ)
- T. sohimperi*
- T. heimii*
- T. le-testui*
- T. microcarpus*
- T. robustus*
- T. striatus* var. *ochraceus*
- T. umkowaan*
- T. versicolor*

採集者名には、ネパールの著名な菌学者、Mahesh Kumar Adhikari 博士のお名前も。

博士は、佐野書店の佐野悦三さんが出版をサポートされた『Mushrooms of Nepal』の著者でもあります。

嗚呼、こんなことなら、事前にもっと勉強してAdhikari 博士に「お会いできませんか」とダメ元で連絡しておくのだった一、と後悔しましたが、時すでに遅し。

中国から荷物が届く連絡がようやく入り、すぐにルンビニに発たねばならなかったのであります。

ルンビニにて

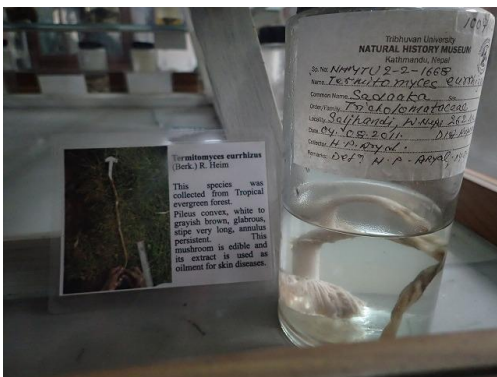
ルンビニは、インド国境に近い町。ご存じ、お釈迦様のご生母「摩耶夫人」の実家のあったところで、お釈迦様誕生の地であります。

ルンビニでは友人スッパ氏の家に泊り、そこを拠点に、釈迦の生誕地を記念するマヤー聖堂や、釈迦が青年時代をすごしたカピラバストゥの遺跡を見学しました。

カピラバストゥ城は、考古学的には、釈迦が生きた時代(紀元前5世紀)の遺物はほとんど出土しておらず、仏教を篤く保護したアショーカ王の時代(紀元前3世紀頃)の遺品と遺構しか出土していないのですが、29歳となった釈迦が求道の旅に出たという「東門」の跡に佇めば、まさに仏教の出发点に立っているのだなあとの感慨から、思わず身が引き締まるのでした。

ところで、このカピラバストゥ城址でも、思わぬキノコとの出会いが。

マンネンタケが、日干し煉瓦の脇から生えていまして。煉瓦から出るわけではないので、たぶん木の根などがあつたのでしょう。



こういう貴重な場所なんだから、発掘した煉瓦に腰掛けるとか、触るとか、とんでもないと日本人としては思うのですが、そこはおおらかというか、何事もユレイ土地柄。

外周2キロメートルほどの城跡を見学者はほぼ自由に歩けまして、したがって、城壁を形作る煉瓦の脇にキノコが生えているからといって、それを採ってもだれも何も言いません。

「四門出遊」せず、城内に引き返した私はそのマンネンタケを写真に納め、キノコ採集の煩惱の巷に戻ることを決意したのであります。

ムシコットにて

さて、そもそも、この旅は友人の故郷の山里に行くことに主眼があったのですが、その山里とは、ルンビニから北上することバスで約10時間、ルンビニとダウラギリ峰の間ぐらいのところにある、ムシコット (Musikot Khalanga) であります。標高は1,400メートルほど。

もともとは松林が広がるところで、少し開けたところに人々が畑を作り、生活しているという山里です。

周りは1,000~2,000メートルの低山に囲まれ、晴れれば遠くアンナプルナ、マナスル、マチャブチャレなども望めるという土地です。

ここにスツバ氏は18歳ぐらいまで住んでいたとのことで、彼の案内で、近くの林を歩きました。

林は、三針葉のロキシブルギーマツ (*Pinus roxburghii*) が優占する中をシャクナゲ (ついでながらネパールの国花です) がところどころ生えているという感じ。

季節的には日本の秋によく似ていて、「ことによると松茸も」などと邪念を抱きましたが、9月以降、乾季に入り、地元の方によると、キノコ的には全くシーズンオフだとか。

とほぼ (やはり、ルンビニで「東門」を出て悟りを得るべきだったか)。

それでも、気を取り直して、松林を歩くと、ちらほら、キノコが目に入りだしました。

日本のそれとよく似た種もあれば、見たことがないものも。

肉眼的にある程度同定できたものは――

キヒラタケ (*Phyllotopsis nidulans*)

アシナガヌメリ (近) (*Hebeloma* sp.)

クギタケ (*Chroogomphus rutilus*)

ヤブレベニタケ (*Russula lepida*)

ブドウタケ (*Nigroporus vinosus*)

コフキササルノコシカケ (近) (*Ganoderma* sp.)



ヤブレベニタケ



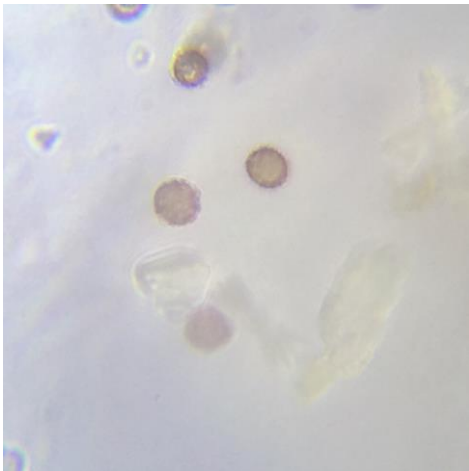
クギタケ

他にも、同定できないものが多数あったのですが、一つ、どうしても気になったニセシウロのような腹菌がありました。

差し渡し3センチメートルほどの日本でも見かけるような大きさのものがあるかと

思えば、同8センチメートルという巨大なもの。表皮は硬くて厚く、成熟したものは頂部にヒビが入り、そしてパツクリ割れて、黒褐色の孢子塊を覗かせます。日本で見かけるニセシヨウロ属とはかなり雰囲気異なります。

そこで、これを宿に持ち帰り、日本から持ち込んだ携帯顕微鏡で見ると、孢子にはトゲがありますが、模様のようなものは見られません。大きさは直径10マイクロメートル弱でした。



この情報をもとに、先述の『Mushrooms of Nepal』を見ると、*Scleroderma* の検索表 (p.138) があり、これに当てはめると、

「柄がなく、子実体が2センチメートル以上で、棘がある」ものとして *S. cepa* が行き当たりました。



標準和名では *S. cepa* は「タマネギモドキ」とされているようですが、果たして同じものか。

なにしろ、過去に見たことがないので、これ以上、確信をもって申し上げることはできないのですが、大変興味深く思いました。



さて、このキノコですが、地元で暮らすスッバさんの親類の方に尋ねると、「プリケチャウ」と呼んでいると教えてくれました。

プリケというのはネパール語で「体つきが小さい」、チャウは「キノコ」という意味なので、プリケチャウは、「チビキノコ」とか「チンチクリンタケ」とかいう感じでしょうか。

そして驚いたことに、このキノコは地元では、フライにして食べるというのです。

California Fungi のサイトには、*S. cepa* は有毒とあるのですが・・・

ことによると、検索表にある *S. citrinum* と混同されているのかもしれませんが。こちらは、Adhikari 氏もマーケットで売られていることを記述しています (p.158)。

どんな味が気にはなりましたが、優秀なシェフでもある、我が友人は、真顔で、「怖いから食べちゃダメ」と言ってくれましたので、食べませんでした。

「怖い」と言えば、外国でのキノコ観察のものも、実は大変「怖い」ことであります。

今回は、現地出身の友人が、少年時代から良く知っている土地を、一緒に歩いてくれたからこそ、安心してキノコ探しが出来たわけです。

植物相が豊かということは、野生動物もたくさんいるはずですよ。それを友人に尋ねると、彼はこう言いました。

「たくさんいるよ。熊はあんまりみないけどね。飼い主のいない雄の水牛は気が荒いし、近寄っちゃダメよ。あ、あと、虎がいるからね。夕方になったら、森に入っちゃダメ」

「え？虎？ 見たの？」

「見てないけど、声するよ。2年前に、うちの山羊と犬がやられたね」

「やられたって、食べられたってこと？」

「そう。虎は山羊と犬が大好きね」

「人間は？」

「人間は、そんなには好きじゃないね」

「そんなには」っていうところが妙にリアリティがあってとっても怖くなったのでした。



カピラバストゥ城の東門跡に佇む筆者

□

【紹介/p. 27の関連記事】

ブラーさんのヒトヨタケ・インク

ファーブルの昆虫記に匹敵するといわれる A. H. R. Buller (1874-1944) の『菌類の研究』(全7巻)。その第4巻にヒトヨタケ・インクの記述があります(文献1、69-72頁、図参照)。約百年前の本ですが、さらに昔のフランスの P. Bulliard (文献2、全600葉の図譜集) や、M. Boudier (文献3) のヒトヨタケ・インク情報も一緒に紹介されています。ヒトヨタケのインクの方がササクレヒトヨタケよりよく(粘性がある)、粘性を上げるためアラビアゴムを入れるとよい等のコメントも(文献3を引用)。ブラーさんは、ヒトヨタケ類好きで、今読んで驚くようなきのこ話が沢山掲載されていて、百年前の本とは思えません。ブラーさんの本は私の手元にあるので興味のある方はどうぞ。(吹春俊光)

【文献】

- 1) Buller, A. H. R. (1931) Researches on Fungi IV, Longmans Green and Co., London.
- 2) Bulliard, P. (1784) Herbarium de la France, Paris.
- 3) Boudier, M. (1876) Notice Sur L' encre De Coprin, Bulletin de la Société Botanique de France 23: 299-302.
(文献3はタイトルで検索するとダウンロードできます)

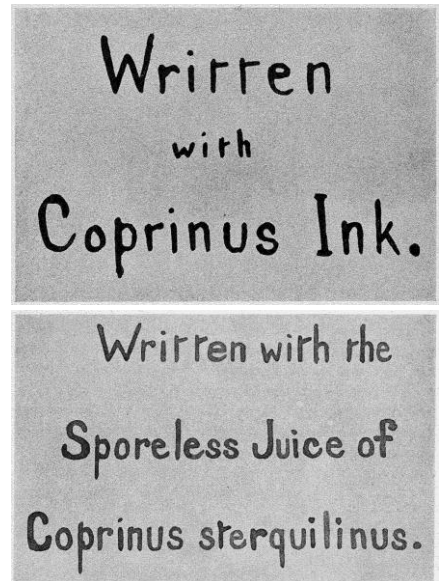


図1 (上) マグソヒトヨタケのヒダがとけた汁で書いたもの。文字が黒々としているのは黒い胞子が含まれているため。
図2 (下) 胞子を漉しとって24時間置いたもの。黒い胞子無しのためインクの色は胞子が混じる図1の方が濃い、しかし胞子無しでも意外と黒い(酸化のためと説明がある)(図1・2とも文献1)。